

SDGs スタートアップ研究分科会

アドバンスコース第3回情報交換会 実施報告

2022年12月10日

PMI 日本支部

SDGs スタートアップ研究分科会

アドバンスコース・リーダー 歳弘 浩三

去る11月26日(土)、SDGs スタートアップ研究分科会のアドバンスコース第3回情報交換会を開催しましたのでご報告いたします。

アジェンダは次の通りです。

1. 2022年度SDGs スタートアップ研究分科会活動状況概要
2. アドバンスコース参加団体の情報交換
 - a. 舞鶴工業高等専門学校（舞鶴地域における小規模河川の防災対策プログラム）
 - b. 株式会社カルティブ（企業版ふるさと納税を利用した地域課題プラットフォーム）
 - c. 有限会社ウイルパワー（循環ビジネスの社会的役割の実施）
 - d. 高野山真言宗[大師教会] 和歌山教区<三密教会>（生活の継続が保証される町づくり）
 - e. 株式会社インフォテック・サーブ（iCD活用でSDGsを達成）
 - f. ブルージョブズ株式会社（SDGs×広報応援プロジェクト）
3. フリーディスカッション

各項目の概要をお伝えします。

1. 2022年度SDGs スタートアップ研究分科会活動状況概要

・SDGs スタートアップ研究分科会

PMI 日本支部は、SDGs 達成プロジェクトを効果的に軌道に乗せ推進する方法の開発・普及を図るために、2019年10月から内閣府「地方創生 SDGs 官民連携プラットフォーム」に「SDGs スタートアップ研究分科会」を設けています。

本年度は、昨年度に引き続きSDGs プロジェクトのマネジメント手法を学ぶ「ベーシックコース」と、実際に事業として行っているSDGs プロジェクトを支援する「アドバンスコース」の二本立てで実施しています。

去る10月23日(土)、SDGs スタートアップ研究分科会の2022年度SDGs スタートアップ研究分科会-ベーシックコース第1回（キックオフ）を開催しましたのでご報告いたします。

詳細は次のウェブサイトをご覧ください。

SDGs スタートアップ研究分科会の Facebook を開設しました。 ご参加ください。

[PMI 日本支部 SDGs スタートアップ研究分科会 | Facebook](#)

アドバンスコースの開催

本年度のアドバンスコースは、原則として 2019 年度、2020 年度、2021 年度のベーシックコースに参加された団体で実際に実行されている SDG プロジェクトを対象としています。すでに SDGs 事業を開始していて、基本的なプロジェクトマネジメントの知識をお持ちの場合は、途中参加もご相談に応じます。

図 1 にアドバンスコースの位置づけ、スケジュールを示します。

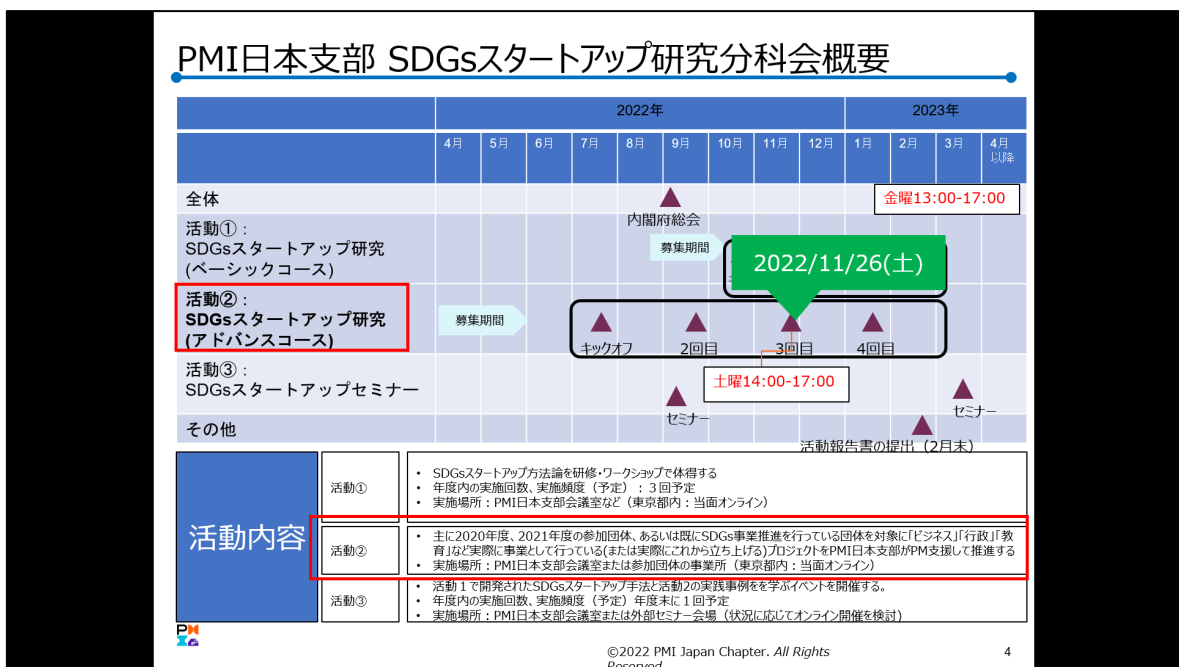


図 1 アドバンスコースのスケジュール、活動内容

2 アドバンスコース参加団体の情報交換

現在アドバンスコースに参加されているのは6団体です。

6団体に SDGs 取組み状況をご報告いただきました。

a. 舞鶴工業高等専門学校（舞鶴地域における小規模河川の防災対策プログラム）

（報告：舞鶴工業高等専門学校 校長 内海康雄氏）

- ・北近畿地域でのステークホルダーを巻き込む事例として、京都府知事、舞鶴市長、舞鶴市教育委員会や周辺自治体(舞鶴市、綾部市、福知山市、京丹後市、宮津市(OB)、与謝野町、伊根町)、福井県高浜町と面談・協働確認して、ニーズやシーズを把握し、首長、企画政策担当、教育委員会、市議会(一部)と協働してプロジェクトを決めてきた事例が報告された。
- ・小規模河川の水位監視システムプロジェクトにおいては WBS の更新版を基に、洪水予測システムの運用で、舞鶴市の総合モニタリング情報配信システムでの志楽川カメラ映像と水位データの事例の紹介、舞鶴市と舞鶴高専の学生(防災士)が共同して防災士の育成を行ってきた。
- ・地域人材の育成として、舞鶴高専が設定した「防災士研修講座」を舞鶴高専学生、舞鶴市役所職員、市民を対象に舞鶴市と協働し、学生(防災士)がファシリテーターとして参加、支援し、防災士の育成に貢献している。2022年10月に防災講座を実施し、50名受講して45名が合格。舞鶴高専学生(3, 4, 5年生 計10名)がメンターとファシリテーターとして支援した。
また、2022年9月にジュニアドクター育成塾にて小中学生約40名に対して、防災講座を実施し、舞鶴高専学生(防災士)がメンターとして参加してきた。

b. 株式会社カルティブ(企業版ふるさと納税を活用した地域課題プラットフォーム[river])

(報告:株式会社カルティブ 企業版ふるさと納税コンサルタント 小坪拓也氏)

[river(リバー)]という名称で、「企業版ふるさと納税の活用を目指す自治体と企業が、制度利用のためのコーディネートを得られるサービス」を提供しています。

- ・パートナーの立上げとして、エプソン販売(株)主催の「企業版ふるさと納税」を開催し、4回の勉強会を通じた参加者の満足度が満点で、企業版ふるさと納税のプロジェクトを企業に提案するイメージがもてたと回答を頂いた。
- ・内閣府・経産省イベントで、10月18日にビジネスマッチング会を実施。申込者数417名に対して参加者が405名、最後まで300名近く残っていた。これまでの実績ではコミュニケーションタイム参加者は10名位なのが、今回43名だったので成功と言える。57件のマッチング希望の案件があるので、来年春までに1件ずつ丁寧にriverで対応していく予定。
- ・当初作成のリーンキャンパス、ロジックモデルなどの棚卸、実施施策の棚卸し、不足部分の施策の補填、フレームワークの見直し、市場調査・事業評価事業全体の見直し、個別事業の評価システム作りを検討している。

c. **有限会社ウイルパワー(循環ビジネスの社会的役割の実施)**

(有限会社ウイルパワー 代表取締役 江川 健次郎氏)

(報告：PMI 日本支部 SDGs スタートアップ分科会 今野 代読)

・サーキュラー・ベースの構築として、地方行政との連携、リユース・リサイクル優先するところで、行政と連携したい。

進行状況として、全国清掃事業連合会との連携、倉敷市の SDGs 施策リサイクルフェアに参加予定。

* サークュラー・ベースとは？

リユース・リサイクルを中心とした資源循環（流通）

価値が分からない商材を業者参加のオークション等により適切な価格で換金・寄付できる仕組み。

国内で流通しない商材（使用済み食器や婚礼タンス・中古ぬいぐるみ等）は海外のバイヤーで需要があるのでコンテナ等に入れて発送する。

物販できない品物はリサイクル。廃プラも取り扱う予定。

・アドバンスの支援で行っているサーキュラー・ベースの構築スケジュールを1ヶ月に1回進捗状況を管理している。

ロジックモデルを作成して整理している。ロジックモデルを作ることで「思い」を明文化して「ミッション」「ビジョン」として落とし込むことで、すべき目標が明確になることを認識。

サーキュラー・ベースのミッションは、活用されていない地域資源（人・モノ・思い）を役立ちに変えて循環ビジネスの存在価値を高める。こと。

d. **高野山真言宗大師教会 和歌山教区<三密教会>**

(報告：高野山真言宗大師教会 和歌山教区<三密教会> 浅田慈照氏)

・2022年度<三密教会>プロジェクトとして

「生活の継続が保証される町づくり」をテーマに一年限定プロジェクトとして、防災と地域交流による地域再生小さなプロジェクトを推進している。

・柿の木坂地区は、山を切ってそこに住宅を1985年に開発した開発型のニュータウンで、盛り土ではなく切土で建設された地域で岩盤は固く地震には強い。

令和4年3月時点：約400戸、人口：1044人、高齢化が進み、75才以上高齢者数：421人、高齢化率：40.3%であり、岩盤が固いこともあり、災害対策として、避難所へ行くのではな

く、在宅で避難するというこで、赤いタオルと青いタオルと「在宅避難 安否確認方法マニュアル」<三つ折りのリーフレット>を400戸全戸に配布して在宅避難 安否確認を行うことを提案した。赤いタオルはSOS支援要請、青いタオルは小難・無事、タオルが出ていない場合は、危険と判断しすぐに踏み込むことを意味している。

- ・今迄はSDGsのゴールマッピングとしてSDGs11の住み続けられるまちづくりをメインのターゲットとして考えていたが、SDGs5のジェンダー平等の実現も織り込んでおり、三密教会は女性支援としてスタートしていたので、その得意分野へ舵を切っていく予定である。

e. 株式会社インフォテック・サーブ (代表：橋爪修氏)

(報告：株式会社インフォテック・サーブ 志村氏)

テーマは：iCD活用でSDGsを達成 主要なゴール 8: 働きがいも経済成長も

- ・共感マップの作成が完了。当初のターゲットユーザーのペルソナを60-65歳・ITエンジニアと高齢者社員の多い企業経営者の2つに分けていたのが、賃金に不満のある社員と賃金に不満のある社員をもつ経営者になっていった。

As-Isシナリオの共有として経営者が持つPain/Gainを確認し、IBMのデザイン・シンキング手法を使用し、投票を行い以下の3つの課題に絞り込んだ。

- a. 採用候補者を含め社員の客観的な評価が困難である
 - b. ワクワクする仕事を創出できる環境を作りたい
 - c. 社員の育成を行っても、成長すると転職してしまう
- ・更に3つの課題の中からGainとなる「b. ワクワクする仕事を創出できる環境を作りたい」に集中して討議することとした。このGainを実現するため『ワクワク』という状態を具体化していった。

【作業】『ワクワク』の定義⇒カテゴリー化

【作業結果】『社員が生き生きと仕事に取り組むことで、個人の成長を通して会社を成長させたい』という大きな課題が明確になる。

【Next Action】として課題カテゴリーを定義、これがソリューションの土台となるプラットフォーム・メニューの候補となる。

- A) 制度と仕組み (環境・評価)
- B) マインド (雰囲気)
- C) 実行力 (仕事の内容)

- ・SDGs方法論に関する意見

- 共感マップに加え、デザイン・シンキング (IBM方式) を使用することによって、意

識や立場の制約無く Pain/Gain を洗い出すことができる。

- 全員が意見を言う場を創ることができ、課題抽出に向かう認識共有のベースが整う。SDGs 方法論によってそれぞれの意見を言う場を作ることができ、課題を共有することができたことに効果を感じた。

f. ブルージュオブズ株式会社 （代表：橋本滋氏）

（報告：ブルージュオブズ株式会社 専務取締役 橋本滋氏）

- SDGs 広報応援プロジェクトの概要として SDGs に取り組む中小企業の広報応援隊を目指すサステナビリティライティング事業を推進する。

背景として、

- SDGs 広報応援プロジェクトサステナブル関連の報告書やホームページで文章を発表する機会が増えている。
- 会社の広報担当者向けに文章チェックやリライト、自身で文章が書けるスキルを身につけてもらうためにサポートを行うサービスが有用と考えており、すでに事業化している。
- リーンキャンバスを基に、顧客セグメント、課題、独自の価値提案、ソリューション、コスト構造、収益の流れ、チャネル、主要指標、圧倒的な優位性に関して説明。サステナビリティ関連の知識、情報アウトプットの経験があるライターが講師であり、読者目線、プロとしてアウトプットした経験を元に、サステナビリティ情報発信をサポートすることができることをブルージュオブズ事業の競争優位性と考えている。

- ブルージュオブズが SDGs 事業として目指しているゴールは、

① ホームページ販売

当社オリジナルモデル「SDGs ホームページ」の導入を増やし、その会社で働く社員が誇りとやりがいを持って働くようになる

② 自治体×SDGs 推進プロジェクト

自治体×SDGs プロジェクトに参画し、具体的な取組み：企業誘致、地域情報の発信で地域を活性化

③ SDGs 広報応援プロジェクト

具体的な取組みとして、TNFD、TCFD の普及活動

3 フリーディスカッション

アジャイルコーヒーでその場の参加者でアジェンダを決めるリーンコーヒー形式のフリーディスカッションを行い、参加団体からのテーマを基に示唆に富んだディスカッションをおこないました。 いろいろな話題や意見が出て有益な時間でした。

The screenshot shows an Agile Coffee retrospective board. The title is "SDGs分科会アドバンスコース2022年7月". The board is divided into three columns: "Discussion Items" (green cards), "Current Being Discussed" (one red card), and "Done Discussing" (purple cards). The interface includes a header with "Agile Coffee", "Prime Directive", and "New board" buttons, and a sub-header with "Sort by Votes" and "Filler your cards" options.

本件についてご関心、ご要望がありましたら下記にお問合せください。

PMI 日本支部 SDGs 担当(sdgs@pmi-japan.net)